

シャネル・ジャパン最高経営責任者リシャール・コラス氏によるカンフェランス

2011年10月4日

オリヴィエ・メレリオ氏による紹介

みなさま、こんばんは。日仏経済交流委員会は、リシャール・コラス氏を再びお迎えできることを嬉しく思います。1953年にオード県で生まれたコラス氏は、17才で初めて日本に渡ります。以来、40年以上に渡って日本で生活をしておいでです。1985年にシャネル・ジャパンに入社、1995年からシャネル・ジャパンの会長を務められています。在日フランス商工会議所の会頭でいらしたこともあり、国家功労勲章（Ordre National du Mérite）、レジオンドヌール勲章を授勲しているほか、旭日章（Ordre du Soleil Levant）を授かるという榮譽を受けておいでです。コラス氏は作家でもあります。彼の処女作「la trace（邦題：「遙かなる航跡」）」はご自身の日本滞在初期の記録をつづった作品であり、2006年に日本で、2007年にフランスで出版され、両国で大きな反響を呼びました。第2作目「Saya（邦題：「紗綾」）」は2010年「みんなのための文化図書館賞（Bibliothèque pour tous）」賞を受賞し、コラス氏ご自身が日本語に翻訳しています。今晚コラス氏は、3月11日以降の日本のようすをお話ししていただきます。

リシャール・コラス氏

みなさま、こんばんは。まずは震災当時に駐日フランス大使であり、2011年9月初めに任期を全うされたフィリップ・フォール氏にオマージュを捧げたいと思います。フランス大使館および個人としてのフィリップ・フォール氏が、危機の最中、そしてそれに続く数週間、精神的な面でも物流的な面でも、われわれ在日仏企業を大変支援してくださったことに感謝を申し上げたいと思います。

さて私は、3月11日の震災発生時には日本に居ませんでした。2日間の日程で上海を訪問しており、妻にも合流する予定になっていました。妻は地震直前の飛行機に乗り、従って、彼女も私も震災の日には東京に居なかったのです。震災を知り、私は義母に電話をして、子供の無事を確認しました。しかし、回線が完全にブロックされてシャネル・ジャパンには電話がつながりませんでした。このために、われわれが、震災を十体験したのは日曜日の午後が最初でした。それは情報のカオスでした。政府のスポークスマンであった枝野氏は、たくさんの情報を出しているようであり、実際には、彼から伝えられるものは限定的でした。得られる情報は、当然のことながらフィルターがかけられたテレビ向けの情報でした。なぜなら、すでに起こった惨事を超えた、地震以上の破壊力を持ったパニックを引き起こすことは論外だったからです。非常な混乱の中で冷静を保った日本政府には敬意を払うべきで、菅首相も誠実な対応をしました。東京にはまったく被害はありませんでしたが、ただちに人々が懸念をはじめたのは、福島第一原発の危機でした。私はフランス大使

館とコンタクトをとっていました。フランス大使館は、日本政府がわれわれに示す以上の、より深刻な情報を流していました。月曜日はまだ、シャネル・ジャパンにとって何らかの決断をするには時期尚早でした。しかし、火曜日の朝、菅首相が福島第一原発の周辺 30 キロを避難指示地域に指定すると発表したとき、私は菅首相の沈んだ顔色をみました。シャネル・ジャパンの従業員も同じように沈んだ顔色をしているのをみて、私は北部の事業所を一週間閉鎖することを決意しました。従業員を移動させることも考えましたが、4000 人に及ぶ人間を、当時のようなストレス状態で動かすことは容易ではありませんでした。私の役割は、彼らが家族の世話をできるように便宜を図ることだと思い、交通費・宿泊費・レンタカー代などの費用を会社が負担すると発表しました。この決定は、日本の高級品産業界で波紋を呼びました。しかし最終的には、LVMH、ルイ・ヴィトン、ディオールなど他のメーカーも同様の措置をとりました。その後、他の問題のために大阪に旅立ちました。東京と大阪の間に、イケアの店舗がシャネルの倉庫から 800 メートルのところにあるのですが、このイケア店舗が液状化現象により、沈下し倒壊する恐れがでてきたのです。シャネルの倉庫も同じ運命をたどるのではないかと懸念が出ました。そこでフランスから到着する製品を、大阪へと転送せねばならなくなりました。大阪には緊急対策室を設置しました。3 日間、高級品業界は危機を管理し、協力し合いました。産業の中でも高級品部門だけが、連絡を密に取り合っていたのではないのでしょうか。他の欧州企業が、このように協力し合ったという話は聞いていません。いずれにせよ、高級品部門が結託したことで、われわれのパートナーであるデパートに対しても、共通の対応を示すことができました。デパートは震災直後も開店していましたが、フランス高級品のショップインショップは閉鎖を強行しました。フランスの高級品業界は、日本では非常に目立つ存在です。ドイツの企業などは、すぐに東京を離れました。しかもドアに鍵をつけたまま、日本人従業員に指示を与えることもなく、ドイツに帰国してしまっただけです。在日のドイツ企業は重工業です。消費者から遠く、従って目立たないのです。しかし高級品メーカーは目を引きます。われわれは一度も日本の地を離れたことはありませんが、フランス人はすぐに日本から脱出したと非難され、実際に脱出したドイツ人は批判されませんでした。フランスのメーカーは日本に残り、状況を管理するために最善の努力をした、という事実を強調したいと思います。

日本は最初に INES レベル 3 と発表して、これを後にレベル 7 に引き上げました。フランスは危険の重大性を即時に判断し、われわれにはこの情報が与えられていました。菅首相は、東京の住民を 48 時間避難させることまで考えたということですが、これは、まさに日本人の不安の大きさを物語っています。しかし 3000 万人を避難させることは容易ではありません。その上、菅首相は同時に、何十万という被災者を管理せねばならなかったのです。

欧州では、福島第一原発の危機が、東北地方における深刻な事態を隠してしまいました。東北の沿岸都市すべてが消滅してしまっただけです。私は、損害のひどかった地域をいくつか訪問しました。陸前高田（住民数 2 万 3000 人）はすっかり破壊され、何も残っていません。この港町を以前は知らなかったのですが、知っていればショックはもっと大きいものだったでしょう。この町は完全に打ちのめされ、死の静けさが漂っています。南三陸も訪問しましたが、陸前高田と同じような地形で、平和で美しい入り江の奥にあり、海岸線もすばらしく、非常に住みやすそうな穏やかな

町です。しかし、これほど美しい自然が、死をもたらすこともあるのです。海での波高が34メートルに達し、その波が18メートルの高さとなって都市を飲み込みました。世界に福島第一原発事故がショックを与え、世界的な大危機が叫ばれましたが、結局これが、45万人の被災者を出した東北の悲劇を隠してしまいました。東北地方では死者2万3000人、行方不明者9000人を出しています。

在日の他のフランス企業と同様に、震災は他人事ではないと感じ、シャネル本社もシャネル・ジャパンも、赤十字に多額の義援金を送りました。個人的にも赤十字に義援金を送りましたが、その帰り道、まだ満足しきれない思いが残りました。そこで、シャネルで被災者を支援することにしたのです。津波発生から1ヶ月半のことでした。当座の必需品は確保されていました。被災者の方々は、食べるものや温かくするものは入手できており、数日前から、服を着替えたり風呂に入ったりすることはできるようになっていました。最初の3週間は、水もなく、体を洗うことすらできない人もいたのです。風呂が伝統の一つである日本では考えられないことです。シャネル独自の支援にあたっては、気仙沼を選びました。内陸60キロのところにある一関に行き、地震直後にたくさんの被災者を迎え入れた避難所を訪ねました。まだ600人ほどの方が避難生活を送っておられました。こんにちでもまだ100人程度の被災者がここで生活しています。この避難所で、1ヶ月以上も顔の手入れができていないと言う女性たちに会いました。そこで美容部員のグループと一緒に、この地を訪れることにしたのです。われわれは、心のケアをするために美容部員による支援プログラムを策定しました。多くの従業員が、プログラムへの参加を希望しました。一関を4回訪問し、最後の1回は15人の美容部員が、20人ほどの女性のメイキャップを行いました。また9月には音楽プログラムも計画しました。ボランティアミュージシャンによるコンサートを開きます。できるだけ長期間に渡って、定期的にコンサートを開催したいと思っています。

とはいえ、被災地からは人がいなくなっています。残ることを希望する人もいましたが、それもできません。何もないのです。仕事もありません。瓦礫などを取り除く作業も残っており、これには数年が必要となるでしょう。そもそもこの土地に、再建が可能なのでしょうか。可能であるという人もいますし、不可能であると言う人もいますが、心理的には難しいでしょう。被災者の方々はみな、家、商店などを持っていたのに、まさに「混乱」の中に放り込まれてしまっています。

3月11日の震災にプラスの側面があるとすれば、それは全世界が「津波」を契機に日本を再発見した、という点でしょう。斜陽気味だった日本が、世界の中心に戻りました。同情もあったでしょうが、この震災により多くの産業が苦境に立たされたことも事実です。自動車産業は、東北地方で付属品や部品を製造していました。我々の産業も、アパレル部門が顕著でしたが、製品の製造に欠かせない熟練工場がなくなってしまい困っています。日本が居ないと困る、ということを世界が再確認したのです。世界からの同情に加えて、日本人の国民性についての懐疑主義的な反応もみられました。「日本人は、確かに平静を保った反応をしていたが、それも当然だ。日本人は宇宙人だからだ。普通の人間ではない。これだけの不幸に襲われているのに、被災地域が混乱に巻き込まれることがないというのは驚きだ」という人がいました。私にしてみれば、不幸に不幸をさらに重ねることができると考える人

たちこそが、まさに宇宙人です。つまり、普通の人間とは争い、盗むものだと考えるわれわれ西欧人こそが、おかしいのです。私はこの日本人の国民性に対する懐疑主義を、非常に残念に思います。

もう一つ興味深かったのは、人のつながり「絆」の重要性が再発見されたことです。日本では震災を機に、結婚ラッシュがおこりました。これは今年の間まで続くでしょう。ソリテールリングの売上が急増し、われわれのジュエリー部門にとっては良い材料でした。今回の大きなショックにより、日本人の精神性への回帰がみられるでしょうが、トラウマもまた非常に深く残るでしょう。さらに原発に関連した懸念が、日本には明らかに残っています。これに関して、なぜ日本にはロボットがいなかったのか、と疑問に思われた向きもあるかと思います。日本は2000年の段階では、5機の原発用レスキューロボットを有していました。ところが東京電力は、ロボットの存在はリスクがあることを意味し、東京電力はリスクのない企業である、という理由からこれらをすべて破壊してしまっていたのです。そこで、フランスやアメリカのロボットが送り込まれたわけですが、日本のロボットでのノウハウを考えると、常軌を逸した話です。

さらに問題だったのは、国民がだまされていたことがわかった時です。当初、シャネル・ジャパンの従業員は、なぜ私が会社を閉めるのか、理由がわからなかったようです。彼らは、リスクは全くないと言っていた行政を信じており、政府を信じていました。しかし真実が知れて以来、国民からの行政への信頼は失墜しました。組織や人のつながりが非常に重要な国で、これは大変なことです。シャネルの渉外部部長はすまなそうに、「コラスさん、あなたが正しかったです。政府を信用することはできません」と言いました。自分が足場としていたものに土台がなかったとわかるのは大きなショックです。日本は自然の大異変により弱体化しました。またこの異常に人口が多い関東地域を破壊するリスクがある大地震が、今後30年いつやってきてもおかしくない状態にあります。

そんな中、財産である道具を使って、資材をきれいにし、事業をただちに再開した企業の多大な勇気に注目するべきです。それにもかかわらず、今日、再操業している漁業は10%程度です。福島第一原発事故は、まだ終わっていません。確かに、日本で福島が話題にのぼることは少なくなりました。原子炉に関しての最大の危機は乗り越えたと考えてもいいでしょうが、放射能の問題を抑制するための努力が続けられています。それでも放射能汚染は、存在します。もちろん電力の問題もあります。今夏、孟夏の中、発電制限を管理せねばならず、消費電力を25%から30%節約するように勧告がありました。消費電力を通常の75%に抑えましたが、消費電力を40%抑えても生活ができるということが確認されました。もちろん東京は、以前のようなネオンの都市ではなくなりました。渋谷にいけば、あのネオンがもう使われていないことがわかるでしょう。たしかに以前よりは暗くなりましたが、これで十分に生きて行けるということがわかったのです。以前の生活に戻りました。原発安全強化を求めた大きな運動が展開されていますが、個人的には近い将来に原発をすべて廃止することはできないと考えています。

私は、いまこそ、日本に立ち戻り、日本人を助けるべきだと思います。産業が再開し、我々の業界では目覚ましい回復をみせています。例えばシャネルは、10日間、売上がまったくなかったわけですが、当初の年間予算の化粧品部門での目標は達成しています。出費を抑えねばならず、日本人が個人消費を控えるようになったという困難はあり、それによりプレタポルテは大きな損害を受けましたが、小物、皮革製品、宝石へと消費が移り、さらに国外店舗での販売が50%伸びました。国外での売上が日本での不調を相殺したのです。最終的には、比較的上手に乗り切ったのではないのでしょうか。化粧品はやや不調でしたが、ファッションの方では部門によって業績が大きく変わりました。宝飾品・時計部門には良い年になりましたが、他の部門では日本よりも売上が落ちる可能性もあったと思います。とにかく、日本は終焉した訳ではないのです。日本はこれから間違いなく立ち直る力をみつけるでしょう。日本の回復力には目をみはるものがあります。私にとって、メッセージはここにあります。過去10から15年でどこに向かえばいいのかわからなかった日本は、やる気を出して、ポジティブな衝撃を生み出すでしょう。楽観的に見えるかもしれませんが、日本は市場の波に乗っていると感じます。おかしな話かもしれませんが、私は、慎ましやかに伝統に生きる東北のような日本と、価値を失った東京のような大都市に代表される日本の2つが、それぞれのスピードで存在していると思います。関西への殺到はショックな光景として映ります。この大災害後に、本当にたくさんの方が関西に移動しました。フランス人は逃げた、と言われましたが、日本人も多くが西方へと移動しました。大阪行きの新幹線に乗りましたが、これほど、幼い子供を連れた母親を見たことはありませんでした。

シャネル・ジャパンの4000人の従業員のうち、12%がシャネルの提案を受けて、交通費、レンタカー料金、宿泊費を請求しました。500から600人が、家族を移動させたり、両親のところに子供を送ったり、両親に会いに行ったりして一週間の休みを利用しました。正しい決断というものはないと思います。私の決定が良かったとも思いません。10日間、企業を閉めるということには、相当な損害を覚悟しなければなりません。提携先に見放される可能性があります。私は必要だと思われた解決策を取りました。というのもシャネルはビジネスにおいても非常に人間的で、我々も従業員と密接だからです。自分のビジネスや消費者との関係よりも、人間関係を優先することが自然だと思いました。心理的にも、あまりに奇妙な状況におかれます。誰もが弱いところを持っていて、私も福島第一原発事故の後、鎌倉の自宅が損害を受けることを心配しました。私は妻と息子を海外に送りました。一人で動く方が私にとっては簡単でしたし、パスポートも持たずに大阪に行きました。日本を離れることは全く考えませんでした。日本を離れるのは論外で、自分でもそれを非常に興味深く思いました。日本と自分との関係が、クリアになったのです。私の生活は日本にあり、他の地にはないのです。

これまでのところ、福島第一原発事故による死亡者はいません。多分数年後に、数字が出るでしょうが、チェルノブイリとはまた事態が異なります。とはいえ、われわれは東京におり、東北の住民よりもまだよい状況にあります。津波はたったの10分で、家族、伝統、権利書など全てを奪いました。人々は携帯だけを手に、避難したのです。6ヵ月後のこんにちでも、避難所生活をしている被災者もいます。なぜなら行く場所がないからです。彼らは一種のコミュニティを作りました。一関では約60人が、避難所となった体育館で生活しています。そこに新しいコミュニティが数

多くできました。被災者の間では、プレハブ住宅に引っ越すことで、これらのコミュニティを失うことに大きな不安があります。震災後1ヶ月から1ヶ月半後の写真を、ご覧ください。確かに福島事故は大きな悲劇でしたが、沿岸内陸500キロがすべて消滅してしまったことを忘れてはなりません。とあるセンターで、非常に立派な老紳士に会いました。彼は自然に避難センターのリーダーになっており、大変落ち着いた男性でした。彼は、奥さんと娘さん、お孫さんを拾って車で出発したものの、動けなくなって、空になった建物の4階のバルコニーに避難し、そこから津波が人々を飲み込むのを見た、と語ってくれました。われわれが知っているイメージは、本当に凄惨な部分を隠されたものです。家に挟まった死体を回収するのが非常に速かったので、私自身も見たわけではありませんが、何千という死体があったのです。この男性は、車や、15件のコインランドリーを所有していたけれど、実印をなくしてしまった今、行政府に対して所有権を証明できなくなってしまった、と言っていました。いずれにせよ、コインランドリーもなくなってしまったのです。彼は「すべてをなくすと、残るのは尊厳だけだ」と言っていました。日本では死者を埋葬します。死者を正しく葬れなかった人もたくさんいます。火葬を行って49日の法事を行うこともできないということは、大変ショッキングなことですよ。

これが、私が津波を題材にした小説を書こうと思った動機です。声なき声を紹介するためです。物語のような大災害を、メロドラマや悲惨な描写に陥ることなく描くのは非常に難しいことです。しかし我々にはここに残るしかないという現実があります。小説は10月末には書き終わり、3月初めに出版されます。印税は赤十字に寄付するのは止めました。赤十字には多くの義援金が寄せられましたが、それが支給されたのかわからないので、ソニーが支援している村の復興、銀行からの孤児への10億円の寄付など、個人や企業がやっている別のプログラムに寄付をしようと思えます。日本に「国境なき子どもたち（KNK）」というNGO団体があり、子供や高齢者への支援計画など立てています。発行部数も多くなさず、大した額ではありませんが、私の印税は気仙沼の事業に使っていただきます。小説のタイトルは「L'Océan dans la rizière」としました。東北の水田は、海から遠く離れているにもかかわらず、塩害により利用できなくなっており、廃棄物が山になっています。木も塩を含んで燃やすことができません。20メートル、25メートルと積まれた廃棄物をどうすればいいのでしょうか。

以上が、今回お話したかった内容です。私は日本国民を信じており、日本国民へのさらなる賞賛の念を持つに至りました。日本人には誇りがあります。比較的快適な生活を送っていたのに、ある日全てを失ってしまったのです。電気が復旧するのに10日を要した地域もありました。仙台で、冷たい水で髪の毛を洗っている若い女性たちは、髪の毛が凍ってしまいました。自営するホテルに罹災者を受け入れた女性は、4ヶ月後によく水道が復旧したと言っていました。自衛隊や米軍は、死体の回収において賞賛すべき作業をしました。警察も関西から多くの人材を派遣しました。団結のための大きな動きがみられました。自宅にひきこもるオタクと呼ばれる若者たちも、避難所に向かい、立ち上がりました。彼らは、この機会に深い闇から出てくることでしょう。

質疑応答

質問：津波による自然災害と福島第一原発の問題を合せて分けてお話しされたようですが...

コラス氏：私は原発の専門家ではありません。現状を打開するには10年、いや20年かかると言われており、子供の発ガン率上昇や食物連鎖に関して大きな懸念があります。福島や郡山に住む人にはガイガーカウンタが配布されましたが、今のところ放射線量は限定的ではあります。60年前に原発が建造された時には、プレートテクトニクスはまだ知られていなかったのです。

質問：企業内で医療管理プログラムは実施されていますか。

コラス氏：措置は取りました。靴を脱いでプラスチックの袋を付けるようにしました。これによりホコリを避けるのですが、震災の規模からみるとあまりに効果が薄かったので、止めました。企業レベルでは、災害に対して十分な用意ができていないことが明るみになったので、従業員を中心として家族、資産、企業に関してリスク管理の設置を行いました。うまく機能するシステムが日本にはありまして、災害時に自動的にメールを送り、1時間以内に従業員の現在位置がわかるのです。回答率は90%です。費用が高いサービスですが、今回の震災の際にも電話は使えないのに、ツイッターが利用できたということもあり、きちんと機能するシステムです。東京では、震災による被害はありませんでした。家まで徒歩で帰ることを余儀なくされた程度です。従業員は全員スニーカーを買って、事務所に置いています。水をストックしておかねばならないこともわかりました。

質問：子供たちはどうなっているのですか。

コラス氏：子供への支援は比較的きちんと設置されています。個人的な支援をすることが難しいです。子供の回復力というのは目を見張るものがあります。生命は全く思わぬ方法で息を吹き返すものです。ふさぎ込んでいる大人の方が多いです。また高齢者は、苦しんでいるはずなのに、威厳を失いませんでした。こんにち取られているイニシアティブは、地域的なものでしかありません。中央政府はまだ対策をとれていません。誰もが大変な状態にあり、フラストレーションがたまっているところで、地方自治体は、支援金をどのように公正に分けるか、ということを検討しているところです。

日仏経済交流委員会からのコメント

今朝、私は日本から戻ってきました。コラス氏をご紹介くださったいくつかの都市を含め、仙台、石巻、雄勝、そして女川の町を私も訪問してきました。都市の様子は、震災から7ヶ月たって大きく変わりました。瓦礫の多くが取り払われ、これが廃棄物の山となっています。今のところはこれをどう処理するのか、決まっていません。町と廃棄場を往来するトラックの騒音が響く以外は、町は非常に静かです。平穏ともいえる風景の中に、津波によって全て破壊された家の土台だけが残ってい

ます。いずれこれからまた雑草に植物により覆い隠され、数ヶ月後にはこうした~~いた~~津波の傷跡もみえなくなることを思うとでしょう。それは、かえってショックでさえあります。被災地では経済関連の方々にお会いすることができました。~~たくさん会いました。~~地元は、政府の対応に大きな期待をかけておりながら、その対応の遅れに焦燥感を持っています。一方人々は、復興や被災都市の経済活動の再開に尽力する用意ができており、既にイニシアティブを取っていらっしやいました。~~います。~~復興には残念ながら多大な労力と時間が必要であることは周知のことです。とし、どういった協力ができるのかということを特定するためには、現場のニーズを一つ一つフォローしていくしかないという状況が見て取れました。